

第2章 イスラーム教下のイエメン

ー イスラームの諸征服におけるイエメン人達の役割（その3） ー

ヘジラ暦6年よりイスラームはイエメンにおいて広がり始め、その拡大はヘジラ暦9、10年に更なるものとなる。

ヘジラ暦10年、これは聖なる使徒の生涯の最後の歳となったが、既知の如くアルアスワド・アルウンシー・アブハラ・ブン・カアブの運動があった。しかしながら彼の運動は使徒の存命中に根絶されてしまう。

ヘジラ暦11年、前述した様に、カイス・ブン・マクシュウフとイエメンの指導者達の多くの反乱運動がおこる。またイエメン以外でもリッダ（離反）や反乱の動きが起こるが、この事は初代カリフのアブー・バクルの時代の初期のことであった。しかしながら彼は上述のヘジラ暦11年が終わらぬ間に、これら全てを根絶して、イスラームはアラビア半島の諸地域全般に根づくことになる。アブー・バクルは大シリア地方、イラクにおけるイスラームの拡大に目を向けた。それは使徒が、人類全体にイスラームを広める為の真摯な計画の一つとしてその実行を決意していたものであり、アブー・バクルはその実行を目指していた。

既にアブー・バクルは、ムハージル（メッカからの移住者）とアンサール（前者を支援したマディーナの者達）を集め、彼の決意を表明している。次の言葉は彼が彼等に向けた書簡にある。（注：26）「正に神はイスラームによって汝達を好んでおられる。そして汝達をしてムハンマド（彼の上に祝福と平安があらんことを）の共同体となした。そして信仰と（信仰への）確信を神は汝達（の心の中）に増さしめた。知るが良い、神の使徒はかつて大シリアへと彼の関心を向けようと心に決めておられた。そして身罷られた。神は彼の身元に有るものをムハンマドの為に選ばれ給うた。そして見よ、今私はムスリム達の勇者を、その家族と財産と共に差し向けることを決意している。それは神の使徒が彼の死の前に私にその事を伝えていたからである」

（注：26）「イスラームの解放」アルワーキディー著、第1巻 P.2

そこで教友達はカリフの呼び掛けに答えて彼に言った。「貴方の命令を以て命じよ、そして我々を貴方の望む所に指し向けよ」

そしてアブー・バクルはイエメンの人々にジハード（聖戦）を呼び掛けたが、それはイエメン以外でジハードを呼び掛けられた人々に参加するように求められたことでもあった。この目的のためにイエメンに送られた彼の使者は、有名な教友で、使徒の身近の世話をしていたウンス・ブン・マーリクであった（注：27）。ウンス・ブン・マーリクはイエメンの人々に対してアブー・バクルの書簡を読み上げた。その文書は次の通りであった。

「慈悲深き、慈愛あまねきアッラーの御名のもとに、アッラーの使徒の後継者より、イエメン人達のうち神を信仰する者達とムスリム達の中でこの私の書簡を読まれる者へ。汝達の上に平安あれ。実に私は汝達に向けて、アッラーを賛美する、彼の他に神はなしと。さて祝福多き、崇高なる神は、イスラーム教徒達に対して、ジハードを義務と成した。そして彼等にジハードにおいて軽いものであれ、重いものであれ、(身に応じて)兵役に就くように命じた。そしてアッラー(彼を賞賛し、彼は偉大なり)は言った。「汝達の財産と生命を捧げてアッラーの道の為に奮闘努力せよ」—第9章「アッタウバ(悔悟)」第41句—ジハードは義務づけられた宗教義務である。神の身元における報酬は大いなるものである。既に我々は、ムスリム達に対して、我々の元からローマや大シリア地方へのジハードへの兵役を求めた。そして彼等はその事に向けて邁進し、国を出て、軍務に就いた。そしてこの事における彼等の決心は優れたものであった。彼らの美德は素晴らしいものであった。汝等、神の僕達よ、汝等の神の宗教義務と汝等の預言者のスンナ(善行)へと邁進せよ、そして2つの善き事の内の一つへと、即ち殉教か、もしくは解放と戦利品のどちらかへと。正に神は、彼を想念をすることは偉大であり、彼の下僕達の中で、行いのない言葉だけの者に満足し給うことはなかった。そして彼に敵対する人々が、真実により裁定を下されるまで、また彼等がクルアーンの裁定により判断されるまで、もしくは軽蔑された状態で、彼等からジズヤ(人頭税)を徴収するまで、彼等を棄ておきはしなかった。神が汝等のために汝等の宗教を保持され給わんことを、そして汝等の心を正しく導き給い、その行いを純化させ給い、ジハードをし、耐える者達の報酬を神がお与えになり給わんことを。(汝等の上に)平安あれ」

ウンス・ブン・マーリクは付け加えて言った。「神に讃たえあれ、私は証言する、アッラーの他に神はなし、ムハンマドはアッラーの使徒である。ところで私は汝達へのアッラーの使徒の後継者の使者である。正に私は彼等を兵士の状態のまま残してきた。汝達を待つことのみが、彼等に敵へと向かうことを阻害しているのだ。だからムスリムの諸君、汝等に対する神の支援と慈悲をもって、汝等の同朋のもとへと急げ」。

ウンスはそこここで、例外なく良い返事と受諾に出会った。それはイスラームに対して確信している人々の側からだけでなく、以前に背いたり、災難を引き起こしたりした人々もそれに呼応したのであった。そしてイエメンはその一族とその子孫達を提供したのであった。

この事においてアルワーキディーはその歴史書の中でこう言っている。「ウンス・ブン・マーリクがアブー・バクルの元へやって来て、その人々が到着した、という吉報をもたらすまでに日数は掛からなかった。彼はこう言ったのである『イエメンの勇者達、英雄達は、髪は白くなり、埃に塗れて貴方の元へやって来ました。彼等は貴方の元へ、子供達や財産と共にやって来たのです』。アブー・バクルはそれを聞いて喜び、その日を過ごした。もしその

翌日になったとしても喜んでいたのであろう。人々の土埃が現れ、アブー・バクルは馬に乗り、人々にも彼等を出迎えるために騎乗するように命じた。イエメン人達はアブー・バクルと随行員が彼等を出迎えているのに気付く、旗を揚げた。その旗は数々の大隊や次から次ぎへと続く行列を照らした。人々は人々の後に、部族は部族の後に、そして最初に現れた部族はヒムヤル族であった。彼等は白い鎧を着け、アラブ式の弓を携えており、ズウ・アルキラウ・アルヒムヤリーがこれを率いていた。それから全ての部族がやって来た。その中には、例えば名馬と槍の民であり、カイス・ブン・フバイラ・アルムラーディーがこれを率いるマズハジュ族やその他の部族がいた。人々はメディーナの周囲で下馬し、その数は段々増えていった。だがカリフは大シリア地方に向かうことを彼等に命じなかった。彼等にとって害となったことのうちには、とりわけ食料と馬草の欠乏とがあった。そこで彼等の内の主だった者達がアブー・バクルの元に出向き、彼に言った。即ち我々の軍隊は完全に整い、また我々は自分達の一族を置いて来ている。滞在は我々に害を及ぼす。何故なら貴方の国は駱駝の脚の国ではなく、また蹄の国でもないからであり、またそこには留まっている者の生活もないからである。そこでもし貴方が決定を下さない様であれば、我々に故国に帰るよう命令して下さい、と。アブー・バクルは言った。「イエメンの民よ、そしてこの地にやって来た者達よ！神にかけて、私は汝等を完全な状態にすること以外は望まなかった。また汝等も害することも欲しなかった」。彼等は言った。「我々の後ろには誰一人として残ってはいない。アッラーの祝福の上に、決心をして下さい」。そこでアブー・バクルは人々を招集したが、その中にはアルアウス族、アルハズラジュ族、そして彼等以外でやって来た者達がいた。アブー・バクルは彼等の上にハーリド・ブン・アルワリードを据え、そして彼等は大シリアへと進軍して行った。イエメン人達は監督官としての立場を得たのであった。

この事については以下の様な別説もある。最初の日にはイエメンからやって来た者達は凡そ21,000人であった、とかである。即ちアブー・バクルはアッカ、アルアシャーイル、ヒムヤルの部族を大シリアに当て、それからそこにやはりイエメン人達から成る大シリアの軍隊を加えた。その軍隊の中にはアマール・ブン・マアディーカルブ・アルズバイディーとアルアシューアス・ブン・カイス・アルキンディー及び両者の随行員達がいた。同様にアクラマ・ブン・アビー・ジャハルとその軍隊も加えたが、その軍隊はイエメンが回復し、平和が定着し、諸地方は安定化してから彼と共にイエメンからやって来たのだった。

アブー・バクルはまたハムダーン、ムラード、マズハジュの部族をイラクに当て、そこにはカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディー及びその随行者達を加えた。大シリア地方のヤルムークそしてイラクのカーディシーアの2か所、或いはそれ以外の場所で、イエメン人達はムスリム軍の前衛であった。

要するに歴史家達の著書は、イスラームの出現以来、その普及と支柱の強化のためのイスラームの布教とジハードの呼び掛けにおいて、イエメン人達が大きな役割を担ったことを織

り交ぜたのだった。大シリア地方、イラク、北アフリカ、アルアンダルス（アンダルシア）に定住していたアラブ人の多くはといえば、イエメン人をルーツとする者で、その祖先達は、それらの地域でイスラームの普及に重要且つ大きな役目を果たした。

エジプト進出後、アレキサンドリアのイエメン人達の数、アルマクリージーがその著書「遊牧民から成るエジプトの地の人々の分析と考察」で語っている様に「ムアーウィヤ・ブン・アビー・スフィヤーンの時代には27,000人に達していた」。更に彼は「ウマイヤ朝建国はイエメン人の手によってなされた」と述べた。

スペイン南部のアンダルシアにはウマイヤ朝時代に、その進出にイエメン人が参加した時から、イエメンの名を保持し続けている場所と城塞が、未だに存在している。それらはグラナダの近くにあるハムダーン城塞、アルヘシラスとセビリアの間のハウラーン城塞、セビリアのヤフシブ城塞、セビリアとコルトバの間のムラード砦、グラナダ州の有名なバニー・サイード城塞等であり、アンダルシアの都市で有名なコルトバ、セビリア、グラナダ、トレド、その他、それら全てはスペインの南部地区を構成していた。そしてこれらの地は、アルワリード・ブン・アブドルマリク・ブン・マルワーンの時代の進出に貢献者の一人であるムーサー・ブン・ナシール軍の指揮官ターリク・ブン・ジヤード将軍が進行してから、ウマイヤ朝の統治が定着した地域であり、それらはヘジラ暦84年と94年の間のことであった。

イエメン人の中でアンダルシアとアフリカにおいてイスラームの勝利をもたらすことになった有名な将軍に、アブドルラハマーン・アルガーフィキー・アルアッキー及びアッサマフ・ブン・マーリク・アルハウラーニーという人物がいる。最初の（イスラームによる勝利の）旗は、ウマイヤ朝のアブドルラハマーン1世によって掲げられた。彼はセビリアに「入城したアブドルラハマーン」として名高い。この時の旗は、緑のターバンで、イエメン軍の指揮官であるアブー・アッサバーフ・ヤヒヤー・アルヤフサビー・アルヒムヤリーのものであった。また「入城王」アブドルラハマーンがコルトバを攻め落とそうとした際にも、当時の彼の軍隊には未だ（正規の）「旗」はなかったのである。

史家達（注：28）の中には、イエメン軍が戦線を離脱した理由を疑惑視している人々があり彼等に依ると「イエメン人達は戦利品と生活の質のより向上を求めて（戦線から）離脱していった」ということであるが、これは真実には程遠く、史実の支持するところでもない。

（注：28）「イスラーム下のイエメン」Dr.イサームディーン・アブドルウーフドルウーフ・アルファッキー著 P.45

悠久の過去に根ざした太古の始源以来、イエメンの人々は移住を好んでおり、つついそれに気が向いてしまうのだ。だからこの戦線離脱という「移住」も彼等にとっては何も始めてのことではないのであり、それどころか、それ以前にも移住は頻繁に行われ続けてきたのである。

カリフ職に就く者が、イスラームの勝利を呼び掛けてきた大シリア地方やイラクのような国々は何処でも、そこはイエメンへの中継国であった。それらの国々でイエメン人達は、大きな集団を作って生活を営んでいたのであるが、時には大シリア地方のガサーシナ朝やイラク南部のムナージラ朝の様な国家を築いてしまうことすらあった。たとえカリフによるジハードの呼び掛けにおいて、これらの国々に移住するきっかけが掴めなかったとしても、当のイエメン人達は、カリフの呼び掛けが必要だと思わずに、いともたやすく諸国へ移住していくことであつたらう。

とはいえムスリム達にジハードを呼び掛ける正にそのイスラームを彼等は信仰していたのである。またアラブ人全体の心の中に預言者ムハンマドと教友達が吹き込んだ情熱は、イエメン人達が（イスラームの）勝利へと導かれることに対して、大きな影響を持っていた。彼等は成就しなければならない（神との）契約を心の奥底に見ていた。その契約とは未だにイスラームの教えが届いていない者にその教えを呼び掛けて知らせるという内容のものであった。こうして彼等はイスラーム教国以外の国々で、イスラームの教える言葉が活かされるよう、彼等の努力を向けていったのである。

こうした目的の実現に対しては、聖クルアーンで述べられている次の様な章句が、彼等を勇気づけた。その章句とは、イスラーム教はアラブ人だけにもたらされたものではなく、実に全ての人類のためにもたらされたものである、ということを確認に宣言し、次のように述べている章句である。

「反逆行為がなくなるまで、そして宗教（正義と信仰）が全てアッラーに帰一するまで、彼等と戦い続けよ。（しかし）もし向こうが（反抗を）やめるなら、アッラーが彼等の行動を監視（見守って）下さるぞ」－第8章「戦利品」第39句－

「戦うことは汝等に課せられた義務じゃ。さぞ、いやであろうけど。一体汝等が自分では厭だと思ふことでも、案外、身のためになることかもしれないし、自分で好きでも、かえって害になることもあるもの。アッラーだけが（事の真相を）御存知で、実は汝等は何も知りませぬ」－「牝牛」第216句－

しかし我々は経済的な要素を無視するわけにはいかない。その重要性がイエメンのアラブ人達を、征服運動への参加へといち早く押しやったのだ。この事は非常に自然なことなのである。その時既にアラブ人達は、他の者達がそうであったように、彼等が戦場から獲得していた戦利品の数々に目を付けていた。一方、信者というのは、その宗教（信仰心）のために、自分自身の身を捧げた。と同時に、彼等は現世のためにも働き、生きる上での安楽な生活へと急いで走った。

正統カリフ時代において、イエメン人達が征服運動において成し遂げた役割は、正に彼等の歴史の上で最も美しく、甘美な時代のものであった。彼等は大きな役割を以て、国の解放に関与し、大きな拠点の建設に参加した。そしてイスラームの新しい国々に大人数で住みつ

き、イスラーム教を布教し、それを守りながら、地球の様々な地域へと自分達を拡散していった。

初代カリフのアブー・バクル・アッシッディークが死んで、アミール・アルムウミニーナ（カリフに対する呼称）としてウマル・ブン・ハッターブが後を継いだ際、イスラーム宣教の道において、ジハードの旗印を掲げ、解放の行進を続けた。それは2大国家であるローマとペルシャの鍵となる大シリア地方とイラクに集中して行われた。

ウマルはアブー・バクルがなしたと同様にイエメンにサイード・ブン・カイス・ブン・ザイド・アルハーシディー・アルハマダーニーを派遣する方法でイエメン人達を招集した。

（注：29）これは多数のイエメン人達が参加していた解放軍強化の為であり、サイード・ブン・カイスはイエメンからメディーナへ4,000人の戦士で構成されるイエメン軍を率いて戻って来た。

（注：29）「イエメン・イスラーム史」P.64

そこでウマルはサアド・ブン・アビー・ワカースを指揮官として、イエメン以外で合流した者も併せてサイードが連れて来た軍隊に合流させた。イラクではアルムサンナー・ブン・ハーリサ・アルシャイバーニーとジャリール・ブン・アブドッラー・アルバジュリーや彼等と一緒に戦士達が合流した。また他にもウマル・ブン・アルハッターブからのイラクへの援軍は続き、その中にはアルフサイン・ブン・ヌマイル・アルスクウニーを指揮官とするハドラマウトのキンダからのイエメンの部族でその数400人の戦士がおり、またムアーウィーヤ・ブン・ハディージュ・アルスクーニー率いる600人の戦士、アルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディー率いる700人の戦士がいた。また他にカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーとサイード・ブン・ナムラーン・アルムラーディーとその軍全て、大シリアより撤退させ、イラクの軍を強化した。

ウマルは大シリア地方とイラクへ支援軍を送っていた間、繰り返し次の様に述べていた。

（注：30）「神にかけて、私は外国の王達をアラブの王達で打ちつけるであろう」。

（注：30）「アルカーミル」イッズディーン・イブヌルアシール著 第3巻 P.147

ウマルの元では、外国の王、側近、貴族、説法者、詩人を投獄する以外には、彼等を棄て置きはしなかった。これらの軍全てが、大シリア地方とイラクにおいて勝利を記録した。アルアシャス・ブン・カイスとカイス・ブン・マクシューフそしてアマル・ブン・マアディカルブアルズバイディーとシャルハビール・ブン・アッサムト・アルキンディーまたカーディシーヤ（の戦いの）ムスリムの英雄達の中で上述の者達以外の者の英雄行為は素晴らしく、偉大なものであった。それからペルシャが陥落し、ローマの王座が崩壊し、その権威が失墜するまで、イスラームの解放軍の勝利が続いた。

また女性達がイスラーム解放軍の支援として、彼女達の能力や適切な範囲内で参加した。女性達のグループはカーディシーヤの戦場にやって来たが、その一つには約1,700人の女性がいた。彼女達は伴侶がない者達で、皆がムハージル（移住者）であった。そこでナハア族は700人の女性と婚姻関係を結び、また1,000人の女性はバジーラ族と婚姻関係を結び、ナハア族とバジーラ族は、その時から「ムハージルの女達と婚姻関係を結んだ者達」と名付けられた。

アミール・アルムウミニーナ（カリフの尊称）のウマル・ブン・ハッターブの時代のイエメンの知事達についていうと、彼等は初代カリフのアブー・バクル・アッシッディークの時代の知事達はその儘その座に就いており、以下の者達がいた。サヌアーではヤウリー・ブン・ウンミーヤそしてジュンドではアブドッラー・ブン・アビー・ラビーア・アルマフズーミー及び彼等以外の者達がいた。